

# お化粧品セラピーが 高齢者にもたらす影響について

介護老人保健施設 セージュ新ことに

瀧澤 祐希<sup>1)</sup>

1) 介護福祉士

## 1. はじめに

以前から、私は化粧品などを使うコスメティックセラピーという分野に関心があった。学生時代の施設実習を通して化粧品（コスメティックセラピー）の勉強会に参加し、そこに参加されている高齢者の方々が、化粧品を通してとても楽しそうに会話を弾ませていた。しかし、当施設入所者の中で、化粧品をしている人は少なく、その機会もないため、化粧品に関する会話もみられない。

そこで今回、当入所者3名にコスメティックセラピーを試みた。その結果、入所者の表情、会話などに変化がみられたので、ここに報告する。

## 2. コスメティックセラピーとは<sup>1)</sup>

コスメティックセラピーとは、お化粧品はもちろん、ヘアスタイル、洋服、アクセサリ等の装い、アロマセラピーを利用した環境づくり、心身のコンディションを整えることを含めたものと言われている。

その効果として 化粧品をすることにより、適度の緊張感が生じ、自分を意識する、鏡に向かい、自己意識が高まる、自信回復、対人的積極性が生まれる、などがある。

本セラピーにより高齢者の日常生活にメリハリをつけ、女性であることを意識させるとともに彼らの存在価値を見出させるのである。

## 3. 研究方法

- ・期間：8月8日から22日まで8回のお化粧品実施期間を設ける。
- ・対象：三名の入所者に協力を依頼。
- ・方法：三名をそれぞれに観察。自由に化粧品していただき、不十分な場合や困惑された場合は職員側がサポートする。
- ・道具：ヘアブラシ、ヘアバンド、アイブロー、アイシャドー、口紅を用意。
- ・評価：観察の視点を中心に評価。

### 【観察視点】

化粧品はその人の顔を見分けるものとされ、自分をどう見せたいかという意識が表れる。

外に出るだけ、人に会う場合など、環境によってお化粧の方法なども変わる。

化粧品を行う側は、ただ化粧品をするのでなくコミュニケーションをとりながら、今日の化粧品はどのようにするか等、本人の意思を大切にしていく。

## 4. 利用者紹介・実践

事例1：

- ・A氏、80代、女性
- ・診断名：アルツハイマー型認知症

### 【A氏の観察視点として】

夫の面会時の表情、会話  
本人の整容に対する意欲の向上

1 回目は、A 氏「こんな歳なのに化粧するのかい」と話すも、口紅の色なども自ら選び、鏡を見ながら塗る場面も見られる。2 回目からは、鏡を見ているうちに本人の眉の形なども気にされ、「もっと細くしたいの」と希望する発言もある。職員側でハサミを使用して眉を整えると、終始笑顔で髪の毛も自らとかし、口紅に対しても「結婚式は赤だったけど、この歳だと恥ずかしい」とペーパーで口紅の色なども調節する。

3 回、4 回目以降になると B 氏に口紅の色を勧めるなど、お化粧を楽しんでおり、自分の顔を鏡で見ながら歯の色、髪の色なども気にし、身だしなみに対する意欲が見られた。外に出かける日は、真剣な顔で鏡に向い、いつもより濃い目の化粧をした。

第 7 回目以降になると、自分で化粧ができるようになり、夫の話や、昔の話、今と昔の化粧の違いなどを明るい表情で話していた。職員から「綺麗ですよ」と声を掛けられると、「そんなことないよ」と謙遜し、笑いながら会話を楽しんでいた。

#### 事例 2 :

- ・ B 氏、90 代、女性
- ・ 診断名：老年認知症、難聴

#### 【K 氏の観察視点】

会話が増える。

鏡を見る回数が増える。

他者との交流が増える。

整容に興味を持ち整髪が自分で行える。

1 回、2 回目化粧道具を手渡すも、K 氏は「昔はこんななかったからわからない」と話す。鏡を見て「こんなしわしわだし、お婆ちゃんだから」と発言するも、化粧をしていく中で徐々に楽しさを覚え、3 回目からは鏡を見て自分で化粧をする。口紅の色なども自分で選び、嬉しそうに鏡を見ている場面も多くあった。

5 回目には、他者と口紅やアイシャドーについて笑顔で会話する。6 回目以降は、整髪も自ら一本に束ねるなどの場面も見られた。また化粧室へ入ると「前にもここに来たことある」などの発言も聞かれ、化粧のことを記憶している。

#### 事例 3 :

- ・ C 氏、60 代、女性
- ・ 診断名：アルツハイマー型認知症、高血圧、両耳難聴

#### 【C 氏の観察視点】

難聴、認知力の低下によりコミュニケーションがうまく図れない。

発語が増えることを期待して行った。

H 氏には筆談で化粧について説明してから行った。1 回目は口紅も、「若い頃やったけど今はわからない」と話し、またアイシャドーの色の多さに驚いた様子であった。化粧後の本人は声をあげて笑い「薄野に行けと言われる」と何回も繰り返し話す。

2 回では化粧後に笑顔で写真撮影に、応じるなどの場面も見られた。3 回目以降は、筆談なしで口頭とジェスチャーで化粧することを理解し、眉を書いた後も「こんな感じがいいのかしら」など他者の目も気になる様子が見られた。

5 回目には、化粧仲間と腕を組み、笑顔で「お世話になりました」と礼を述べるなど初回に比べて発語が増えた。6 回目以降は、化粧仲間同士のコミュニケーションも積極的になった。

## 5. 結果

### 1) A 氏の結果

夫面会時の表情明るい。

化粧したことを覚えている。

自分で化粧品を選ぶなど、整容に対する意欲が向上する。

## 2) B 氏の結果

自分で整髪が行える。

他者との交流が増える。

口紅、アイシャドーの色を自ら選択できるようになる。

手渡しにより自発的に化粧が可能になった。

## 3) C 氏の結果

化粧道具を見せると化粧をするということを認識している

自ら化粧をするなど手馴れてきている。

普段あまり聞かれない言葉、発語が増えた。

## 6. 終わりに

今回は3名の入所者に協力して頂き、このような研究を行うことができた。施設の中で、楽しみのある生活をして頂きたいと考えており、生活の場としての環境作りはもちろん、喜びや生きがいを感じてもらえるサービスの提供が必要であると考えます。化粧を行う中で、入所者同士の会話なども生まれ、笑顔で過ごす場面も多くあり、化粧が生活の楽しみの一つになっているという結果を得ることができた。

入所者の笑顔を見ることで、化粧が及ぼす影響の大きさも感じることができた。これからも介護を行う中で、化粧を含め、入所者に喜びや楽しさを感じてもらえるサービスを提供していきたい。

## 文 献

- 1) 矢野美千代：高齢者のコスメティックセラピー。一橋出版社，東京，pp36 - 71，2000
- 2) 上戸環：「化粧療法」開始から1年を経過して。耕仁会学術研究論文集第11号(2004年度)，札幌太田病院，pp30 - 34，2005